琉球大学学術リポジトリ

拾玉智恵海巻之上

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2021-09-08 キーワード (Ja): 所収コレクション：琉球大学附属図書館宮良殿内文庫, 宮良殿内（みやらどぅんち） キーワード (En): In Collection: The Miyara-Dounchi Collection (University of the Ryukyus Library) 作成者: -, 2021/9/8 16:09 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/49073

拾玉智惠海卷之一上

十宮氏[illegible]

石頭也

[illegible]

智慧海叙

凡天下の事物小即て推て知る当然
乃理あり推て知らざる自然の理あり
通をしらず遠きを求め卑きより高き
に登る筐於天の工をなすとかや
柯を執て柯を伐る其長短を執て
[illegible]柯を則[illegible]眺して視
聲相し其聲なりしとハ[illegible]
知らずを見安小益[illegible]問に損なし

故に賢者乃至は訓ゆる餘瀝（レキ）なり
故且聖人の街に於潺湲（ミタリ）なり
搜を遂ひ委所何の海を渡すなり
渡りて深きより至る人自海入者を
知る無ふ之事の如し

拾玉智恵海巻之上目録

智郷門

一 竹を編造ひ入しやう　八丁目ヲ
一 竹の物花生胴じめ入やう　同ウ
一 風玉の法（その化と火を浴と二寸玉なり）　同ウ
一 陽の連物（鷹）面をしやう　九丁目ヲ
一 陰雛の山坂七曲等間乃井やう　九丁目ヲ
一 半切紙其外一切紙乾早くつぐ法　十丁目ヲ
一 陽も外も重ねて飯を炊きやう　同ウ

一 漱まて指幸く面を指に飯を焼きやうの事

一 梶竹の[illegible]まて[illegible]不逆[illegible]やう

一 [illegible]しに[illegible]やう乃傳

一 [illegible]知れぬ[illegible]を知る

一 竹の筒[illegible]生の[illegible]を[illegible]

[illegible]やう乃傳

一 [illegible]を[illegible]過[illegible]やうの

一 五[illegible]の[illegible]のあるを[illegible]見[illegible]法

一 [illegible]道[illegible]飯を[illegible]

傳授門

一 金[illegible]やうの

一 蛇の[illegible]生れ[illegible]文字[illegible]

[illegible]

一 [illegible]の[illegible]やうの

一 人[illegible]の[illegible]光りを[illegible]

一 小刀[illegible]焼小を[illegible]

一 石の[illegible]法

一 石に文字をすゆる法

一 走る時鳥のきつれ風法
一 刀脇指の結を下違をとす法
一 號なしに相家共やうのこと
一 晒帷子の誓にひ逆白すること
一 法人平産をする法
一 雷の落ぬ札のこと
一 盗を防ぐす法
一 井へ物の落ちたを汲ば井乃座へ吹せ
さうしやうのこと

一 万鳥の飛り想を出つりぬ法
一 鑵に龍鳥の破らるをつぎやうのこと
一 茶碗にも不覺地数に穴ひ様のこと
一 書物に小に書しやうの傳授
一 竹を班にする法
一 針の法 書ふ 折へる一 授法
一 寒月雲氷にも足凍へさる法
一 饑を除く方
一 小字を大字に写す法

一 手足冷切散

一 磁器(いしやき)損し出来ぬのしつ

一 扇子に書しつる文字をおとすには

一 絹ハ眼脂をふき二時と名には

一 墨を地にてこきたるを落しやうの事

一 衣ニ墨乃盛たるを落しやうの事

一 衣服よ血の付たるを落しやうの事

一 衣服に油なとつきたるを洗て落すに

一 蟷螂松茸ノ句ゐ発散漬物の法

一 夏日暑火ありきて湯を沸すにハ

一 秘傳ハ年此續やう

此法前しくしゃ後世日て生礼ごとし

一 小便を久しく堪へる法 其飯米の汁文やき此法ハ用ゆ のゝ花 不しく換せず飲ゆ

一 あつ陽ナよ池をうけまして

忽ちかゝら奴しやう

一 燈火ありある法

一 湯来きたるをしやう

一 書物衣類ニ出くさるしめ

一 髪を黒くし 光澤を出す法
一 日和の花を黒くと知る法
一 菊の花を黒くすべし 貯ふ法
一 様の花を黒くする法

拾玉 智恵の法 上段様

拾玉智恵の法巻之上

無術門

竹をて臨ちかめしやり

一 竹を臨ちかめ切やうは花性のまゝにかけ[illegible]を

かくれ如く墨かし 竹を拔据すべし墨かち

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

冷し地除かけ入なるへ凡或ハ方根にて腸造焚ら是ニ同
但し凡まそも方根まそも初まれ[illegible]
竹花生胴じめ入様此の

一此胴しめ此入
とあつかれど

たゞめく腸と入金

其を腸ノ入ゝる和
此ハ[illegible]とくゝし扨胴メを下へ[illegible]
出のとく胴メ入 花生と成なり

此ハ[illegible]

風玉乃法 大を[illegible]玉の製法

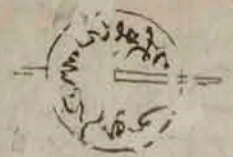
一薄き胴ノ[illegible]の形なる地を掘し腹に計まて

寒ゝ如き完ハり葉より枝を[illegible]
[illegible]入金[illegible]出ゝ完ハり
自ら[illegible]明[illegible]妙なり

腸れ法利 靨なるし[illegible]

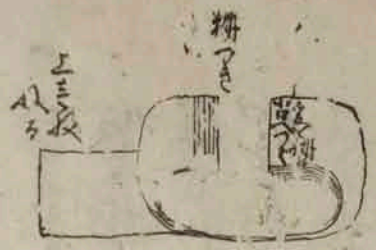
一[illegible]入[illegible]中へ金[illegible]入[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
嶮難の[illegible]七曲九[illegible]

見參雜の山坂ハ此平ニ[illegible]ハ間[illegible]
[illegible]ひづ[illegible]で[illegible]間[illegible]



參雜の山坂七重りなる間を折る事
此界のとく如上のを摘へ[illegible]押[illegible]
何[illegible]此[illegible]を[illegible]此法[illegible]
依[illegible]て[illegible]遠[illegible]翌[illegible]

參小右仕様ハ　[illegible]



[illegible]紙をつく法

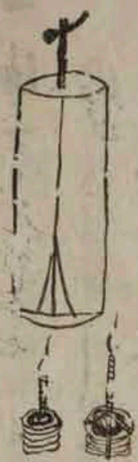
[illegible]紙[illegible]
一[illegible]をつくるハ[illegible]に
[illegible]に摘へ[illegible]
[illegible]
小口へ糊[illegible]の底の方[illegible]
[illegible]糊[illegible]小口の上[illegible]
一枚[illegible]
小口を糊小口へ[illegible]
[illegible]

一渡ふつげく然もよく老く、[illegible]
福もかも書きおくて飯と炊きやうのす

一山中は柴中なとにても菜は何遠ちは福金なくし
飯に炊きやうなき時は去遠の淨き土地を
深さ五寸ばかり堀米と鑄に入れて其中
切れ土をきせ去遠の草木木の葉と集め
其上にて燒いもらにして堀かしたまんか滅まて
けしと如なり
潮よく塩辛くなき様に飯燒やうのす

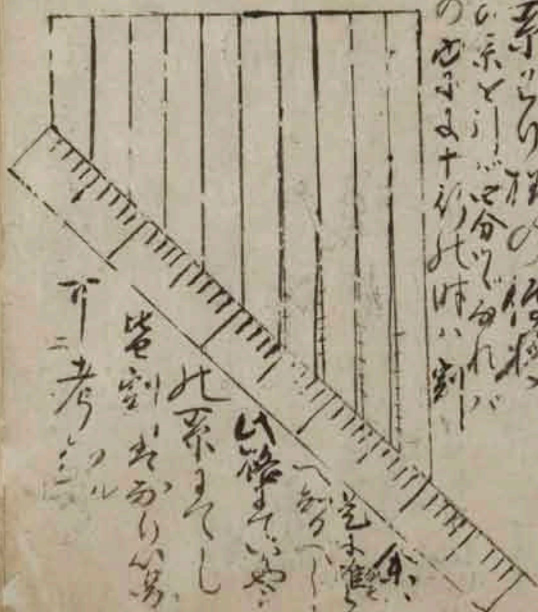
一海上道に霧かしてハ潮ばかり
潮にて飯燒ばしたまへ一口も食し
代時福ならし金にても座へ食椀とうつむけ
入れ其上へ東といれ潮を沒へ志うけ燒なり飯
とにて後器へ乞ひ入れば塩にくうつむけ
する椀の中へ入れまりと有飯ばしもしハ
らず奇妙なり
梶灯なきとき飯にて何人まへにても其速こし
らへやうのす

一 誰にても闇の夜に挑灯なき時不意の用意ら
先土器(かはらけ)二枚を以て糊にて付け合せ蓋の後もし其
壺もし此蔵の器と紙を以て能く飯を以て
穴をあくべくさり よくよくつけて土器の真
中に穴をあけてすこし通して挑灯と成と云
此の所(あとさき)土器に油を入れて足の紙燭を入る
燈に切り此に挑灯を知るべし



右挑灯穴抜たれば何の器にても新らしく
出来る也

一 たとへば頼朝かしこに系図より枕の継ぎ様
よく知らしむ三寸の小十枚は系としるし合せてわれば
にて此は三寸の内まで十行此は割
其の内へ四寸の
出し とすれば あて
切るべきまで
事し とは



来のもと来ほしやうに削りこもくかなき
物はもと来志まつぬ故知らず

一 木の本来知れぬは川へ流して見る色しぬと
ばそ知れても本はしもへ知り流れる事奇妙
なれ

或人曰四角如木目如き唐木なり先木條化寒へ
上下知流川へ流しこれ
又曰四角如木四方見而ぎせ木れしなりとし
答曰此二ケ系ハ無く知りれは漬ぬれ

竹の筒花生ニ水丸ニ塩を山が浅ぬ知り一り
きりやうのこと

一 竹花生其外紙花をむ此紙樣ハ此ニ

先器あらうを今くあらぬ如ふ笠代の所ハ此
竹の切らんと思ふ事を多ぎはまして其のく
に入物の親きやうて後多へ粉糠を多なり
物洋をそつとしあげ天王がむらひげになく多
隙に筋つくなり此筋の通りを拭きれはおしも
ゆがまた

長く大きな枝木をせざきし辻引廻しやうのこと

一 枝木辻を引廻し此背しい角の家を前せしこと
今は枝木の先乃方屋根を鍼袖に車の上に枝

とりさく枝木を立てかりよりて車と枝木の
庇を木挺にて廻し置き上にて考へ合へし
有明の燈のあるいを知へ見せぬ法
一燒のあるいを火合なしに化へ見せぬしやうは油
土器のよふに横に細き木を置其上に燒火の
上へ向て乾し魚をのせ置なり
東海を行時歩ひにとりて飯を燒る
一中位の竹の上に蓋をこしきのようにしき穴を
あじ中へ蒸をつめ無二穴より外をよき熟

を穴をこしきのうへよくつめ蓋を炬火に掛て
なり炬火の火氣にて和極風味よく飯と知る
外に糸にて竹にけぬけ竹飯竹のやうにて満る心竹に
小刀を立れば石つかりと割る
傳授の
今貴わり やうのこと
一素麺を五分ばとづに切大きな壺に外を入
細如茎を一遍に素麺をよく一遍に又茎を
敷こしに素麺を座六月の比炎天に座に
壺に出くへし何にても上に蓋をしたる 三十

日にあなてゝ自ら合せめ口に生ずる所をたゝみ
みせ中におむらし虫生ずるやうによく／＼たゝく
ありたる虫と見えて色し
蛇の鼻の字を生ませて然るが如く諸るてし文字
また也ず現はる

一 ほねきこいちかうるらしきいざくのなる蛇の鼻の
中にせしめ漆まで諸まても文字まても書蛇
のなとよくつめ塞ぎ孔を一夜いれ置一月ばかり
過て孔を抜漆を抜し見るべし書たる字あらはるゝ

とすハたるを束代すくありて奇物の器と
なる也

一 我木麻植すゝし此茎の蕊やらの
麻種を地へと芝本ほど四角に削り立て
それに瑞のやうあり片瑞はやらハ嵐の葉
とあくあつめあつかめ上に片嵐の葉を蒔
けもし浮に薫と魚役は一夜置ば嵐の葉をして
馬蛤になる也片蝦蛄を合へ入る入て
湯に沸し片熱る湯の中へ入く

志そく者れば此木和らに如かず此庵を
拭まて拭ひ入へ落ひ入へ月中に落へ落り
と造るとも大きなるあつき庵をためるもかく
のことくして為蝕とつくり 竜を木にすり付
れば月中にためらるゝなり 竜にかくてゝる時は地の間に生を受ることを能ふ也

人形鶴の眼より光を出す

一 人形の鶴の眼より光りを出さしむるは胡粉
に壺蝕(ちこ)(紙にてむしこ)とすりまぜ竜をいて眼を彩色す
れば光りを出しけり 如かり

小刀庵丁に鉄或は焼刃を付る

一 玄道作なる法蔵の糞を取まて解小刀庵丁
に五やう焼刃等を半ば付ほど並て能こ
ぎてへい鮮明に五やう付なり

石の破るをつくる法

一 熱る石の粉のわれるをつくは蝸牛(ちつち)の肉を能
祈りつぶし竜をいてつぐへし石田等をそれ永く
離るゝなし 但し石の破口へしく如或は水
蝕家等破目に付はつけす破る時こさまくつく
色し

石に文字をすゆる法

一石に文字をすへんと思ひ煙管のやにを墨にすりまぜ筆にて石に文字を書けば石をせくあぎへ投入金六十日ゆへ後に出し見るに文字に深込洗ひてもすりても落るなし

走る時息のきれぬ法

一走る時息のきれぬ法は走り出しに時より熊と呼吸をあらひ出すなり いろ花走りてし息のきれぬなり影人を見るとも含まるは程よし

刀脇指錆を不逆をとす法

一刀の錆をとらしやう枳殻の實の生しきを熱灰へ切こむしらかしよく灰を拭ひ枳殻まてこすれは錆とく見落るなり枳殻の油物つかば砥の粉をそえかけたれるなり生しき枳殻なきときは乾きたるを一枚分に漬金をとりくこすらへし

鍾（ほうて）

鹽（ほうて）なしに胡麻黄ハやうのよ

一胡ナを紙に能色に丸めて火の中へ投入金に沈かしもこけす如減よく黄ハかるなり

なり胡ナなりまたり紙のこげまるよ理の

理なり

脈惟子の垢を洗ひ多くにくすれば

夏日白魚の時家次を桶に湯でうさひらを

洗ふべし垢をもて去りて多くにくぬなり

法人年産をすゝ法

一此法行れの姫産をて年産すなり小さ味に

鬼鬼女子成就いくのとく用に書なり上包産

のとく封じて表に御守と書裏に封じ

めに云 一字書べし 根中の根なり

雷の落ぬれの法

阿伽多へし 利帝魯 須陀光 西に押へし

蘇阿座 阿伽多 利帝魯 須陀光 蘇陀摩尼と

七魚唱へし 誕芳合天井の五中に押へし

雷鼓劉生電。降電衝大雨 念彼散音力。

應時得消散。此文を七魚唱へし いくの如く

すれば此に雷落ることなし

送人をあらはす法

一其年乃は德祐に供へる昆布を黒焼し

酒の中へ入くこと酒をうるゞらしめ 今

飲しえるべし、並たる二番の砂ハ忽ち頽ぬ
事少なりて悦ニし
・井へ物のおちるならば先井の底へ少さじ焚さ
井の底へ柏の乞ちろの時焼打所かとさげ
てしき底ハ大へ奴色の分は付よより糸打式せ
うつむけ物が火気よ映して底まてふやうに
えとすべし
一 鳥島の縫物よ法のつくぬ法
一 はちハ其ハ由畠の四方の角へ一字の乱れきりろ
い埋血へし 其つりぬすく事めかり

鑵子縫の法
一 鑵子の縫ろぶハ温飩の粉よ石灰せんくをと
加へ合て練りて接へし ○ 永く離れず縫の
継目ハ漆よ 温飩の粉少しのうつへし 少し継目の
ひぶきありてもろきを継ふ時ハ一ちのひきめの所
の方へせ美を紙よおゝへし 付て外より漆よ
て縫ひめらへし 漆八歩ほとひびきめの所へ深
はて一夜ほしおくへし
い事碗を柳焼物密よ穴のあけやらか
一 焼物よ穴をあけんと思ハゝ 其ところほ

青火二灰すへてあとを誰(キリ)まてなめぞこそ
究あく分り

半内に古事れしやら仲良

一 半内に小口平をするに品事が墨走りてつかれ
れとよりなきなかには粗くすゝつぬものなり
新きに小口にそしなきに小口にそも口洗の試を
なにぬりてそ志がりそそそ小口の半無き
此ちつと一遍ぬぐいひしめり此五つちに半へし
低し志めしるれば墨にじむ也かし志めすへ
半まて廻り無しかつくと詳せ此ハ半ゆえ

研(ワカチクル)

一 研(ハ)と雅(まさ)にする法
砒砂 五十研細 緑(おう)巻 三十 右 膽(えん)巻 二十研 石灰 五文
右一処にこ海かに研醸灰けるへ後祈り合せ
は茉まて竹に何にてし紋(もん)と照し乾きたる
時洗うへ此 明(もん)紋(もん)りおとおうちがとし又
磁器(やきもの)竹木の彩に皆は茉こそ極紙なるこ

一 計の場虚におのへうと按に
鍛(さん)束(さ)と黒鍛にして温酒にて飲しむ上にあり
食後に飲しにあれば食あに限に額の
痒(かゆ)きにあり即ち元の処へ按あるに如く

久しく日を経ずるも拔けと云ふ事なし

一 寒月雪氷すれば是浮べざる法
櫻の實を生湯に三日浸漬して陰干にすれて
粉にし寒氷は是に塗ば雪氷すれば凍べざるべし

一 鐵を除く事
大豆を陶洗ひ三遍蒸し湯を去大麻子
ふまみに一束浸し三遍蒸て麻の子口を開く
時湯を去べし二分まで搗て餅の如くに丸め離
に入て初束より束ずまで蒸て束の實の時に
離より丸出し明日の晝晒し乾しつ粉にし

以粉を飽ると食して一切外の物を
始一度飽ると食すれば七日の間飢さるなり
又七日を飽ると食すれば四十九日飢す各十
九日を食すれば三十日飢ず三日
を食すれば二千四百日飢ずいつまでもかく
のごとし口渇は常に麻子の湯を飲べし
若常のごとく食せんと思ひ冬葵を食
粉にして湯に煎じさしして服をべし若は素
金の器のごとくして大便にあるなり三度
ごとく食の進まずかしも害なし此方を用ゆれ

が鄭張顔多くして憔悴（せうすい）するゆゑ而しと
王氏農書にアルとえたり
或人氏法のことくしたるにより法の如く亂を出さて
かしも言かし

小字を大字に写すこと

一 天字を切ぬき火に移す抑法あれども自然に
恰好かねばなし只基盤系の刻いと文字を
写せばかしも遠ふゆゑ唯ば小字を一同
填廓（ひかうつ）して堅横に系をしたる系の幅ゆゑ
勝り卵の紙に始めたるゆゑ唐 基盤 也

始の数程にしらへ前の小字系の紙筆ゆゑ以れ
の正へ点畫あるゆゑを見て後に極へる左の
ゆゑて文字を作れば筆勢恰合かしも省くゆゑ
かしかくのごとく第くに基盤系を極へて写せば
ゆゑ程の大字にもなり大字を小字にするも
右の法の如くして第に系に法をして作るなり
得ても此事同し

蜀のごとく能くに京の水を六に至へし小より虫
に大学にすれば遠くものなり能くに廣く極るへ
て宮也ハ割合也皆くなるに大学を小学にかし
すりも用ひし能なりへし

千里乾り散

一荊芥ノ一陰ハ一草鳥頭一細辛一藁本
右細末にして草履草鞋の内にぬる物ゆへ
てと乾ぬるも能よし何能道を歩りても苦
即ち

磁器乾り用ゆやうのよ

一乾ぎりにきろへきとこそふ下に用ゆまり能を引
ひ能ぎりに地へ埋ミ内へ能きりに所を入
まて此茶を燒へし其後縫まて上へ置ける処を
くへし引ゆ方をしきまてよく用ゆ之

乾きり引きてんと云ひ

乾きり上へ埋ミ内へも此能きりに所を入

板に書かる文字能すし

一其の乾板等書たる文字を能し夜時ハ墨を
指まてすりつけ能也ハ悪くさいたる事ハ又
藁此白灰まて拂もよし

描乃眼照まて十二時を知法

一卯酉●辰戌申寅●巳亥未丑●午子●

右の器以て知るべし此器のとく一時法ぶまて

かくるゆゑ考へ見るに知るべし

[illegible]

墨を池にあるを落しやうの

一墨の池西後に即痒ゆるを多くうくれば池の

深を拭ひ出すべしかしうあれば落を其時は粘を

拭へ池のうちにて唐さ和とに紙にて一く粘を

付墨へ張付置べし暨日減をとれば墨に池

の給かし

墨に墨の盈れるを落しやうの

一墨に墨の盈れるは多をうけてかけは墨の目

へしこゝ出て忘し其まゝ無墨まて于て後部を

其後にてこすべしよく落る也

底脇に池墨の付るを落しやうの

一半夏に烏鬼骨一滑石一白蓉やきこゝ

各ゆゑ右粉にして池の付るは池をかし

かけて潤をし一枚無墨の付いきたるは鉛墨を

とかけて潤をし右の粉を付て法の焼かまて

真こもを細にし又墨の付たるには生の杏仁(きやうにん)を噛て能かし洗ふへし 粟の飯を摺付て洗ふへ
もよし

衣服に酒の志みたるを洗ひ落す法

一 衣服に酒のしみたるには鳥の毛の花のつけおとしを
毛細のさきに不必叉を あてゝよく洗ひつけ
る事り衣の色汁洗ひて かはしても跡
もなし

秘伝松茸貯ひ置の漬様の法

一 松茸を笠をひらき中程より四つに割り 塩漬にして
とときひらきたるの笠をあふむけにして一遍にならへ
よき塩をよき比にふりかけ又松茸をならへ
かくいく通りもかくのことく重ねて其上に重石を
置また此ことくおしつけて
置いつもし入用の時は前日よりつけて塩を
ぬき煮物などすれは色もよくあちはひ
かはらす むすい新しき松茸と同じ事なり

昔炭火おこし方の事

一 炭を釜一つに入れ日に照して
温かなる時釜へ入れ大火にしてよくおこし

竈のわきにおくても竈をしてゆ所を釜の
底へ近く竈の口に見かしある蓋をす
へし炭火かしまて大釜の湯に沸なり

稲沸笋此漬やうの法

一 笋を湯にうちを竹串にてすまして逆し
穴をあけ熱湯へ一度入逆しとりよ立ちぶ
道まさふ所をし貫ふ塩を中へ入胡薦
の穴ニ座つゝ沸湯をとりよ立ちぶ
塩ニ座し笋裏にすへし只今とりよ
笋此ぞし

小沸を今しくてうへる法 [illegible]

一 小沸をげきを悪るまは青松葉をよくすこ
て臍の内へ入座へし

蝋燭を空につる法

一 蝋燭をよくんをこゝねまるまゝ中へ
外根蝋を白蛇なら龍脳ニ是をば根を
焼合ふへ尻此方を某の出さるやうにつめ座
いまそれ火をとるすへし 蝋燭中にて焼なる
音妙なり

煙灯ゆうたんする法

一焼酎にて漆をとくべし かたまりあらはよくとれ古く
なりたる硯の砂 唐墨を落すには ともにおちる也
いつまでも新しくてあかりよく出来てつや吉

鴨の水にて出来したる いさゝかしやり

一漆の汚れを鴨の卵の白身にて落すべし

糠ともよくもみ洗ひ入用の節でもきれいになるべし

汁椀箱等に虫の入りたる

一綿の虫入りたるにはいちぶの蔭へあげおくと
少し寝さして入れてをくに夜具も此法よし 又夜具
このはい聲をみるに其の気にてせいこうし 俗にいふ

よく乾きたるといふなり 又は蒲団の敷目より
干たる川芎を茶に入れ汁にしてからげ 蒲団の
ぬよう入置ば虫は入らぬなり

髪を黒くし光沢や艶出す法

一髪を黒くし光沢を出すには酸漿の葉を煎じて大豆
と煮たる汁を以て髪を洗ひ清水にて漆の
ごとし 又ニ日歯を香を胡麻油に入れて七日ほどして髪に
て撫でつけるに日ならず黒く成るなり

日本の書を知る法

一日の字を書いて紙を日にすかし見れば

一 日の出る時虹(にじ)ハ日和なし
一 東北方に虹立も日和よし
一 一日晴て日和よけれバ三日迄よし三日迄
よけれバ十二三日迄よし
一 雨日ナラバ晴て天氣よけれバ十二三日能おつきよし
一 三日月の光とゞろハ日和よし
一 四日月の光とゞろ月の光つよけれバ三日迄よし
一 月の光りにけれバ天氣よし
一 日の入に西の方あかき日和よし
一 日の出る時東の方に遠雲ハ又赤き雲ハ時

ハ雨ハ雨も赤縮き日和あし
一 雨の降晴并に雲ハ照ハ降ハ雨ハ必ず梅
花ハ易学中指南北法を以て右ハ知へし
毛合ハ言妙なり
一 日の出る時ハ雨ハ日あしまたハ雨なり又ハ
風ふくなり
一 朝西の方に紫色の雲ハ下雨よし
一 又焼るまくの雲ハ風吹なり
一 天氣よきに虹二川ハ大風なり
一 夏土用の内に東風吹て北の方へ吹かへし

花ハ雲の門ニ大雪降ゆり

一知恵鏡のかしらに降かしら夜ハ二百も二百も降ゆり

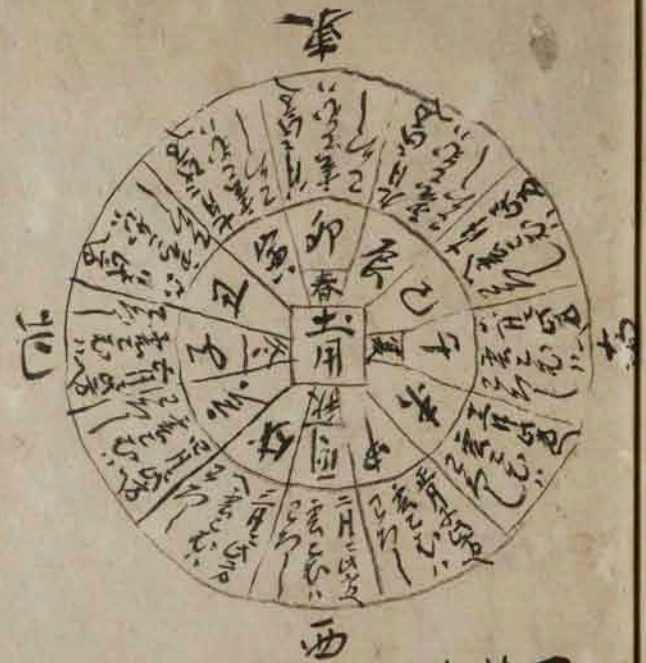
一外雲立ハ二百のうち小夜降ゆり

日和を知事ニ

春みなミ夏ハ西北秋ハきた

たゞあるいつもゆるゆり

年中日和の善悪を知る事、



一年中の日和

れよしあしし

此事を記て考へ

知るへし此分

其方より

雲ある日和

よし知る

ゆり

菓を蒸して貯ふ法

一菓は本物を用ゆべし枝花とより筒に入れ
の湯を口まで一ぱい入石の菓を物まで沈むやうに
法て戸柵へ入よく戸をしめ釜は湯にのせ
湯を捨て外を口一ぱい入釜へしおこ外をかへ釜
しぢくわりくさり入かり切こかし尺と切捨べし

樓の花落ぬ法

一樓は花の葉の中へ塩を入釜へし本は其花も
又ハ花とし物落ぬ事なし

拾五番惠海上終